

●今より少しでも前へ①

中途失聴者の西岡として

相楽難聴者協会 西岡 保

今回、JOHOへの連載企画『今より少しでも前へ』をいただくことができ、たいへんうれしく思います。5か月間、私とお付き合いいただくこととなりますが、どうぞよろしく願いいたします。

原稿を書いている現在、新型コロナウイルスの感染拡大のニュースが連日報道されています。私達、中途失聴・難聴者にとっては、普段でもコミュニケーションに困っている上に、マスクをされている方が多く、より以上に困ってしまいますよね。早く落ち着くことを願うばかりです。

第一回目の投稿は私のことを知って欲しいので、自己紹介をさせていただきます。住まいは精華町、会社員として現役で仕事をしています。

聞こえの話です。今から25年前に不安を感じたのが最初、会社での会議の発言が自分には聞こえにくいにもかかわらず、隣席の方が議事メモをとっているのに「この声が聞こえるの?」と思い、耳鼻咽喉科を受診したところ、軽度の感音難聴と診断を受けました。軽度⇒中等度⇒高度と進行し、現在の聴力は両耳とも75db程度、最高語音明瞭度は両耳で50%、身体障害者手帳6級を持っています。特徴としては、聞き分けが非常に悪いことがあげられ、電車内のアナウンスや人間ドックでの胃透視検査での指示等は、内容がほぼわかりません。

「頑張れば健聴の方と同等に、いやそれ

以上に仕事もできる」その思いを心の支えとしてきたが、4~5年程前くらいから自助努力に限界を感じるまでに、聴力が低下。コミュニケーションが上手くいかないことによる孤立感・疎外感、また、会議や電話対応等「できること」が「できないこと」になり、その喪失感からくる“自分の存在価値なんてない”という自己否定。そういった精神的な危機にぶち当たったのです。

この大きな壁を乗り越えたい一心で会社の休みの日に同障者の集いに参加する中で、同障者や聴覚障害者をサポートいただける方に勇気づけられながら、少しずつ前に進むことができ、昨年9月には「第1回 京都府耳のことフェスタ」において、難聴がわかっての25年間の経験を整理し、パネラーとして発言できるまでになりました。“令和の始まり”と共に“中途失聴者の西岡として”、これからの人生を歩んでいこうと大きく前に進むことができたのです。

やっとやっと、引き摺っていた健聴者の思いに区切りをつけ、本当の意味で自分の聴覚障害の受容ができたというところでしょうか。パネラーとして発言の機会をくださった皆様に、この場をお借りしてお礼を言わせてください。

“ありがとうございました。”

皆様方と共に、『今より少しでも前へ』という思いを持って、これからの人生も歩んでいきたいと思います。



スマートグラスをかけ、諦めていた映画鑑賞が再びできた喜びの私です (^^)

●今より少しでも前へ②

聴覚障害はコミュニケーション障害

相楽難聴者協会 西岡 保

第二回～第四回までの投稿については、私が精神的な危機にぶち当たり、同障者の集いに参加する中で、少しずつ前に進めたことの紹介です。

今回の第二回目は、皆さんもよくご承知の言葉「聴覚障害はコミュニケーション障害」についての紹介となります。

人の悩みは人間関係にかかわることが多いです。その人間関係を考えてみると、そこにはコミュニケーションが存在しています。人間関係はコミュニケーションにより形成されているものです。

私たち、聴覚に障害を持っている者は、このコミュニケーションに障害を抱えており、健聴の方以上に人間関係の悩みが多くなるのは必然と言えます。ヘレン・ケラーが、哲学者カントの言葉を引用して「視覚障害は人とモノを繋がりやすくさせる。一方、聴覚障害は人と人を繋がりやすくさせる。」と言い残されたのは有名ですよ。

聴力が自助努力の限界まで低下すると、職場の周りの方とのコミュニケーションを避けてしまう。そうすると、周りの方も私が聞こえづらいことから、コミュニケーションを取ってこなくなる。ここからくる孤独感や疎外感。

きちんと聞き取れていないにもかかわらず、曖昧な返事・曖昧な笑顔・曖昧な相槌で、その場をやり過ごそうとしてしまい、自分に偽りを感じる自己嫌悪。

コミュニケーションを図れる場として楽しいはずの懇親会。こちらも、話しには参

加できず、周りの楽しそうなのを眺めているだけで、一人だけ別世界にいるような感覚。会費を支払った上に、全く楽しめずに、帰りの電車内では自信喪失。

こういった感情を抱くのと共に、「聞こえないふりしている人」「信頼できない人」「協調性がない人」と思われているのではないかと、周りの目が気になって仕方がない。こころの底から笑えない日々が続きました。

このような中で、私が同障者の集いに参加し学んだことは、補聴器だけでは限界を感じても、その他にもいろんなコミュニケーション方法を活用することで、不完全なコミュニケーションをより完全に近づけてくれるということです。

同障者の集いに参加すれば、ヒアリンググループがあり、聞こえの歪みを解消してくれ、よりクリアな音声が入ってきます。また、要約筆記の方々や手話通訳の方々がおられ、聴覚でのコミュニケーションに視覚でのコミュニケーションを足していただくことができる。それらを職場でも応用すれば、コミュニケーションの手助けになるのではないかとということでした。

私の場合は、ヒアリンググループと同じ機能を持つフォナックのロジャーを購入、聞き取りにくい場合は、ロジャーペンを相手に渡し、しゃべっていただいたり、またはブギーボードを活用して、書いていただいたりしてもらうことで、コミュニケーションが徐々に成り立つようになりました。

私たちにとって、悩みが尽きないコミュニケーションですが、“喜び”というのもコミュニケーションから生まれるのです。私たちも、周りの方と共に喜び・怒り・哀しみ・楽しみ、一緒にいるんだという所属感を味わっていきたいものです。

●今より少しでも前へ③

聴覚障害は情報障害

相楽難聴者協会 西岡 保

今回の第三回目は、前回の「聴覚障害はコミュニケーション障害」同様に、皆さんよくご承知の言葉「聴覚障害は情報障害」での前に進めたことの紹介となります。

「聴覚の原型としては、振動検出器として発生したと考えられている」と以前本で読んだことがあります。生物が身を守るために、音を感知して逃げるという行動を起こす。現在社会では、さまざまな情報が溢れています。その情報を目や耳から取り入れ、私たちは判断し、行動に移しています。聴覚というのは、自らの行動に対する意思決定に重要な役割を果たしているということがわかりますよね。

聴力の低下により、私が経験した情報障害ですが、職場での会議が最も辛いものでした。音としては入ってくるのですが、その内容がわからない。大人数での会議では誰がしゃべっているのかさえもわからない。こういった状況ですので、考えがありながらも主張するタイミングがつかめない。部下に質問され部下が困っているようだが、フォローさえできない。“緊張と苦痛しかない会議参加”でした。

また、年に一度実施する防災・消防総合訓練。働いているビルの16階から非常階段を使って1階への避難では、避難指示の館内放送が何を言っているのか理解できず、周りが避難を開始した姿を見て、後ろをついて行くという具合。

行動を起こすための判断、判断をするための情報を得るといふ、根本的な部分がで

きない。いくら全神経を集中させ、頑張っても、頑張ってもできない状況になってしまいました。

やる気・やりがいを感じていた仕事にかかる情報が得られない、自分の命を守ることの情報さえも得られない。情報バリアにより能力の発揮ができない悔しさが、徐々に自信・プライドの喪失、「会社を辞めてしまいたい」「生きている意味もない」という逃避願望へと展開していきました。しかし、私は一家の大黒柱として家族を守る必要があり、逃げる訳にはいかない。長い間、このジレンマを抱えながら、毎日の通勤を繰り返していました。

同障者の集いで学んだことは、「今の困り具合を黙っていても、誰も気付いてくれない。きちんと向き合い自らが声をあげて情報保障を求めていくという強さ」です。

職場での聴覚障害者は、私ただ一人です。そのような状況で、声をあげていくというのは、ほんとうに疲れ、しんどいことです。要望を出した後も、実現に向けての話し合いの中では、「私は、わがままを言っているのかな」と思ったこともあります。“プラスアルファを求めている訳ではなく、健聴の方とスタートラインをあわせて欲しいだけではないか”“後に続く人のためにも”とこころに言い聞かせ踏ん張ってきました。

その結果、三ヶ年という月日を要しましたが、音声を変換してくれる富士通のコミュニケーションツール「LiveTalk」を会社から導入してもらい、5人程度であれば“意味のある会議参加”ができるようになりました。

情報保障要求の声をあげ、「聴覚障害を持った者が、安心して生き活きと暮らしていける」その環境を作り上げたいものです。

●今より少しでも前へ④

変わることが前へと導く

相楽難聴者協会 西岡 保

第二回目の「聴覚障害はコミュニケーション障害」、第三回目の「聴覚障害は情報障害」で精神的な危機にぶち当たり、同障者の集いに参加、少しずつ前に進めたことを紹介しました。第二回目ではロジャーやブギーボードの活用、第三回目では会社に対して情報保障要求の声をあげ、実現させる。共通するキーワードは“他のサポートをかりる”です。今回は、それが実現できた背景の紹介です。

背景、それは「自らが変わる勇気を持つ」ということです。具体的に変えたことを以下に2点記します。

●「できること、できないことの見極め」

感音難聴というのは、やっかいで話しをする場所の環境や相手の声の高さ等により、聞き分けができたり、聞き分けができなかったりします。その境界線を見極めることが非常に難しく、かつ聞き分けできないことを受け容れたくない。あえて、そこに挑戦していきました。

以前読んだ本で感銘した言葉です。ニーバーの祈り「神よ、願わくば私に、変えることのできない物事を受け入れる落ち着きと、変えることのできる物事を変える勇気と、その違いを常に見分ける知恵とをさすけたまえ」。それを踏まえ、現在、私自身がポリシーとしていることは「できないことは諦め、受け容れた上で、他のサポートをかりる冷静さと、できることを自らの力で更新していく勇気、その見極めを常に心がけていく」。

ネガティブに聞こえる“諦め”という言

葉、この言葉には元来「明らかに見る。現実を直視する。」という意味合いもあります。

できないことをいつまでも、「なにくそ魂で頑張る」ことに時間を費やしても無駄、そこは他のサポートをお願いし、自分ができることを更新していくことに時間を費やしていくことができるようになりました。

●「見えない障害だからこそ、見える化」

「聴覚障害は、見えない障害」と言われます。自らの障害について発信していくことに、難しさと同情を引くようなためらいを感じていました。これを見える化し、わかり易く発信することに挑戦、「できないこと」に対する周りの理解から配慮に繋げる。

視覚的に見えないという点では、補聴器を相手の目につき易い“耳かけ型”にしたがり、鞆や筆箱には耳マークをつける。わかりにくいという点では、自分の障害状態をきちんと勉強、職場ミーティング等の機会を捉え、発信していく。声が歪む・響くといった健聴の方が体験できないことには、漫画の一コマを使い、「私たちにはこういうふうに聞こえるのです」と伝え、コミュニケーションの不完全さやこういった配慮があれば嬉しいという説明を繰り返しました。

「精神的な危機状況にありしんどいが、自分さえ我慢すればいい。変わることの方が前を見通せないだけに、はるかにしんどい。」そういう思いを断ち切り、勇気を持ち変わることができました。

職場では一人で、小さく・弱く、縮こまりがちになっていましたが、「私は何も悪いことはしていない」という強い気持ちを持ち、前に進むために少しでも変わっていく。

自らが変わることで、職場は徐々にいい方向に変化してきていると感じています。

●今より少しでも前へ⑤

新役員となつての思い

相楽難聴者協会 西岡 保

いよいよ、今回が最後の投稿となります。このタイミングに、私は協会の皆様方からご承認いただき、2020～2021年度京都府中途失聴・難聴者協会の新役員になりました。まだまだ若輩者ですが、どうぞよろしくお願ひいたします。

これまでの投稿で紹介しました私が職場で経験したことを活かし、皆様方が安心して、楽しく暮らせる社会の実現に向け、少しでも役立つことができればこんな嬉しいことはないという思いでいます。

今回の投稿では、新役員としてやっていきたいこと、抱負を3点紹介します。

1つ目、とにかく勉強したい。

協会の歴史や今後の方向性、要約筆記派遣制度等、たくさん学ぶべきことがあります。会員の皆様方、サポートいただける方、社会の方に向けて発信していけるだけの知識を深めていくことが必要です。

2つ目、協会規約の第3条第2項にあります、私たちの抱える問題を社会の理解を得るために、発信していく一翼を担いたい。

2014年の障害者権利条例批准から2018年の京都府「言語としての手話の普及を進めるとともに聞こえに障害のある人とない人とが支え合う社会づくり条例」制定に至るまで、諸先輩の方々のご尽力により、共生社会の実現に向け、法整備は整いつつあります。“今、風は追い風”です。

その中で、私が職場でしてきた「見えない障害だからこそ、見える化活動」を社会に向けて発信、理解から合理的配慮に繋げ

る。学校や地域社会といった場で、機会をいただけるのであれば説明したい。小さな石かもしれないですが、投げ込んで波紋を広げていきたいと思ひます。

3つ目、「同じ障害を抱える方に強くなって欲しい」そういった学びの場があるのであれば一翼を担いたい。

私と同じように、職場では小さく・弱く、縮こまりがちになっている方が、たくさんおられると思ひます。その方々に、私たちは、コミュニケーションを取ることや情報を得ることに障害があるだけ。人と人を繋がりやすくさせる障害があつても、多様なコミュニケーション方法を駆使して頑張っている。仕事にかかる情報が思うように得られない障害があつても、職場の一員として役割を果たそうと努力している。そういった強い気持ちを持っていただけるよう、自らが変わる勇気を持つきっかけとなり自信とプライドを取り戻せるよう、取り組みができれば嬉しく思ひます。

私自身、仕事での活躍の場がどうしても限られてくる中におきまして、こうして新たに活躍できるステージを与えていただきましたこと、非常に嬉しく思ひています。

今回の連載企画が、少しでも皆様方への勇気づけ「今より少しでも前へ」に繋がることに期待して、私の投稿の締めとさせていただきます。もし、身近で難聴で悩まれている方がおられましたら、是非ともこの投稿を読んでいただけるよう、おすすめいただくと嬉しいです。

5ヶ月の間、私の拙い連載企画「今より少しでも前へ」にお付き合いいただき、ありがとうございました。